

有機無(減)農薬栽培により 「野田市の農産物」をブランド化

～「牛ふん」「もみ殻」「剪定枝」を良質な「混合堆肥」へ～

市では、有機堆肥を使って、農産物を生産することで、できるだけ農薬や化学肥料を使わない環境保全型農業を推進して、野田市農産物のブランド化を進めていく計画です。平成19年度は試験栽培を行い、牛ふん、もみ殻、剪定枝等からの堆肥を混ぜた「混合堆肥」の効果を調べてきました。その結果、野菜の育成に効果が期待できることや、良好な成分結果も出ていることから、20年度から本格的に生産し、適価で販売すること、野田市の農産物の品質評価を上げ、需要の拡大を進めていきます。さらに、20年度は江川地区の水田にも「混合堆肥」を活用し、効果を検証していきます。

■混合堆肥で「三石三鳥」の効果

現在、酪農家がつけている堆肥は、価格をはじめ運搬、散布などに手間がかかるため、なかなか普及しませんでした。

また、農家では「もみ殻」の処分困っていたことから、市では「牛ふん」と「もみ殻」による有機資源の堆肥を作り、船形にある「野田市堆肥センター」で作る剪定枝等からの堆肥とブレンドした「混合堆肥」を作り、市内の農産物に利用していただき、品質を高めることができれば、まさに「三石三鳥」の効果も期待できます。

平成19年には、牛ふんともみ殻の混ぜる割合を違えた堆肥を作り、ほうれん草、春菊、キャベツ、白菜の秋野菜4種で試験栽培を行った結果、牛ふん3に対してもみ殻1の割合の堆肥が野菜の育成に効果がある

ことや、日本食品標準成分表と同様な分析結果を得ることができました。

でき上がった堆肥の運搬や散布の方法は、混合堆肥の場合は原則として「野田市堆肥センター」が、酪農家が生産した「もみ殻牛ふん堆肥」を収集し、剪定枝などの堆肥と混ぜ合わせ、混合堆肥として一時保管します。混合堆肥は、年間約3千700トンの生産を予定しています。

希望する農家に対しては、平成21年1月から販売(運搬・散布も可)予定で、2トン(もみ殻牛ふん堆肥1・2トン+堆肥センターの堆肥0・8トン)で千500円です。

また、堆肥の運搬を希望される場合は1回千400円、運搬と散布を希望される場合は1回2千400円を予定しています。

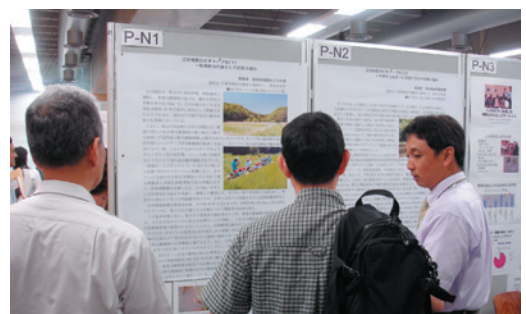
※ただし、堆肥の購入は農業者のみに限らせていただきます。

全国から850人の専門家が野田へ

「日本植物学会第71回野田大会」が、平成19年9月7日から9日まで、東京理科大学野田キャンパスを会場に開催され、植物学に携わる関係者約850人が全国各地から集まりました。

最終日には「利根川水系の恵みと植物」と題した公開講演会が開催され、利根運河や市などが進める江川地区ビオトープも話題にあがりました。

市ではパネル発表形式により、江川地区のビオトープ化に向けた「野田市の行政としての取り組み」(第1部)、「今春から始まった市民ぐるみでの取り組み」(第2部)の2部構成で発表を行いました。



専門家も江川地区での試みに注目を集めていました